

未来に伝えたい

白い森おぐにの

文化遺産

その③ ぶな文化

本町では約3万年前ともいわれる岩井沢遺跡をはじめ、後期旧石器時代から縄文、弥生時代にかけての先史遺跡が80箇所ほど見つかっています。本シリーズでは、そのような先史以降、古代中世、近世、近代へと続く悠久の時のなかで生み出された文化遺産の数々を紹介してきました。

それらのなかには、飯豊・朝日の自然を資源化し、たくましく生きた先人たちの姿を伝えるものがありました。奥山から木流しで材を運び出しおこなわれていた五味沢の木地作り。あるいは、飯豊連峰のまっただ中に夏場だけひらかれた「山の湯」。また昭和初期には、その豊富な水を利用する水力発電所が長者原に建設され、一大産業が町に誕生することとなったのです。

そのような様々な産業を育んできた飯豊・朝日の山々は、その麓に暮らす人びとにとっては多くの恵みをもたらしてくれる生活の場でした。春先のクマヤマ（クマ猟）や、ゼンマイ折りをはじめとした山菜採り。さらには、川漁やキノコ採り、生活道具の素材となる樹皮採取。人びとは、衣食住にかかわる、あるいは現金収入につながる資源を集落のまわりに広がる、ブナやミズナラを主体とした落葉広葉樹林（いわゆるブナ林）に求めてきたのです。

そのような暮らしのなかで、山の恵みをいただき利用していくための知恵や技、しきたりが世代を越えて培われてきました。また、それらとともに、前号で紹介したような山の神に対する信仰や独自の自然観、季節

に対する感受性なども育まれていたのです。町では、このように長い歳月にわたる森のかかわりのなかで培われ、継承されてきた生活文化を「ぶな文化」と総称しています。

記憶や経験を手がかりに森を歩き、山の幸を得る。そして、それらを味わい季節を感じる。あるいは、手わざを用いて植物素材からしなやかに道具を作っていく。このような、ぶな文化の実践は身体

を通して「生」を実感させ、日々の生活に充足感や生きがいをもたらしうるものです。また、山からの恵みを親戚家族や友人たちとともに享受することで、お互いの関係をより豊かなものにする事ができます。そうした自然との深いかわりのなかにある本源的な愉しみや悦びは、雄大な山々に囲まれた本町での暮らしに彩りや活力を与えてくれるものなのです。



▲夏のブナ林にトビタケ（トンビマイタケ）を求める

町内各地に、地域の歴史や伝説、先人たちの信仰を物語る石塔や仏像、寺社・史跡などが多数存在しています。また、様々な年中行事や地域のお祭り、民俗芸能も続けられています。ぶな文化は、これらとあわせ、誇りを持って未来に伝え、受け継いでいきたい「白い森おぐに」の文化遺産なのです。

「今年も！」

地域おこし協力隊

なかはら りょう
中原 凌



雪解けが早く、春らしい暖かさを感じてきました。日中は暖かい時で気温が20度になる日もあり、私の住む叶水地区の子ども達はすでに半袖で過ごしているときもあります。

さて、3年前に緑のふるさと協力隊で着任してから、毎年3月に旧伊佐領小学校を使った雪遊びイベントを地域のかたと開催しています。今年は3月21日に開催し、雪中りんごの宝探しのほか、Naëbacoさん（大石沢の力

フェ）のりんごお菓子のふるまいやアルカディア観光局による靴を固定しないスノーボードのような板で斜面を滑る雪板体験会も同時開催され、参加した子どもも大人もみんながイベントを楽しんでいました。

今年は雪解けが早いので雪板で遊べるのも残りわずか、雪板で遊んでみたいかた、興味のあるかたはお気軽に協力隊中原にお声掛けください～！

令和4年度協力隊活動報告会

日々の活動や小国町への想いなど隊員の1年を報告

2月22日にカモスクエアを会場に令和4年度協力隊活動報告会を開催しました。町内で活躍する5人の隊員が日々の活動の内容や今後の展望などを報告しました。

緑のふるさと協力隊として1年間活動した中野沙和華隊員は「元々、人前で話すことなどが苦手でしたが、任期中に芸能まつりへの参加など、色んなことに挑戦したことで、そうした活動を積極的にできるようになりました。」と隊員として取り組んだことが、新しい自分を見つけることに繋がったようです。

4月には、新たに4人の隊員が加わることが決まっており、今後も、隊員の活躍を期待されます。報告会の様子はホームページに掲載しています。是非ご覧ください。



町長と協力隊員全員で記念写真



報告会の様子はこちら